国際 IC 日本協会　交流会

2022-8-11

支援を通して深まるウクライナと日本の絆

講師： NPO 法人 日本ウクライナ友好協会　　片岡ソフィア

© KRAIANY

皆さま、本日は祝日でお休みにもかかわらず、お集まりくださり有難うございます。
私は、NPO 法人日本ウクライナ友好協会（KRAIANY）会員の片岡ソフィアです。よろしくお願いいたします。

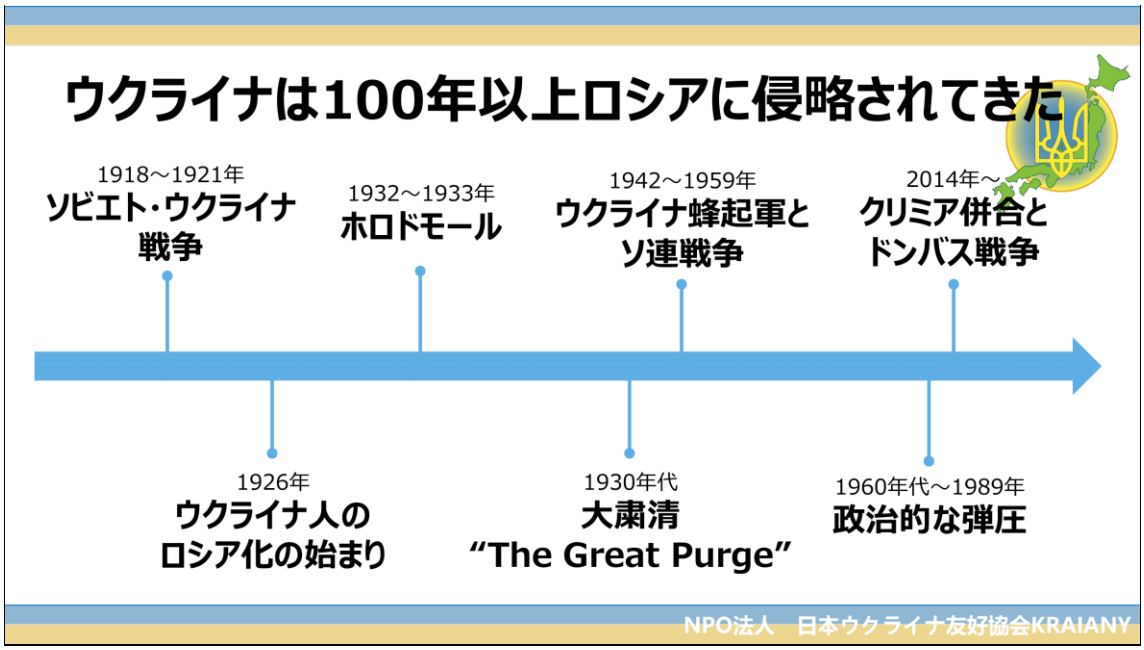
ここにお集まりの皆さんの多くは、今までウクライナの文化や歴史に触れる機会は、それ程多くは無かったのではないかと思います。今は、戦争という非常に残念な形で注目が集まっているのですが、もともとウクライナには美しい景色や何千年も続く独自の伝統があって、何よりも自由を愛する人々が集まっている国です。今の戦争という面にとどまらず、本来のウクライナの美しさも知って頂きたいと思います。
今日の演題は、「支援を通して深まる日本とウクライナの絆」ですが、今、多くのウクライナ人が日本に避難して来ています。そこで本日は、避難者はどういう背景で日本に来ているのか、避難者を支援する上で何が求められているのか、また私たちの団体が行っている活動の内容などについてお話したいと思います。

本題に入る前に、見ていただきたいものがあります。

© KRAIANY

ウクライナと言えば、今はニュースで流れる悲惨な光景が思い起こされますが、こんなにきれいな景色がいっぱいあるのです。ユネスコに登録されている場所もありますし、意外かもしれませんが町の中では WiFi が通じていて、ヨーロッパのシリコンバレーと呼ばれ多くのハイテク企業があります。長い歴史だけではなく、近代化された国でもあるのです。ウクライナのこうした姿も是非知っておいていただきたいと思います。

日本にいる避難民の状況を理解する上で、彼らがどういう背景で来ることになったのか説明したいと思います。
ロシアとの関係で言えば、ウクライナには過酷な歴史があります。ウクライナとロシアは兄弟国家だという言い方がありますが、何百年も前からそういう関係はありません。あくまでも、侵略してきた国と侵略されてきた国という関係です。何十年かの間隔で、ウクライナはロシアに繰り返し侵略されてきました。残念なことに、ロシアのプロパガンダを通じて、ウクライナはロシアの一部だという話が流されていて、日本でもある程度そういう話が定着しかかっているかもしれません。ウクライナには、ロシアとは全く異なる言語、文化、歴史がありますが、長年の侵略の影響で徐々にロシアに取り込まれてきていることも事実です。1800 年代から既に、ウクライナ語の使用禁止政策がとられています。



© KRAIANY

直近の 100 年を見ても、ウクライナを消滅させるために、これだけの政策が採られてきたのです。1917 年にウクライナは独立しましたが、その直後に独立を許さないロシア（ソ連）が戦争を仕掛けてきて、ウクライナはソ連に取り込まれます。この戦争で、ウクライナ人は 10 人に 1 人が亡くなりました。体験者の話によれば、ソ連軍がキエフに入ると、ウクライナ語を話す人やウクライナ人としてのアイデンティティを持つ人は殺されたとのことです。1926 年には、ウクライナに対するソ連化が始まります。国を滅ぼすには言語を奪うことが一番手っ取り早いと言われますが、ウクライナ人にロシア語の教育を強制して、ロシア語しか話せない環境に移してしまい、ウクライナ語の消滅を図ったのです。同時に、ウクライナ語の文学、アルファベット、文法は弾圧され、ウクライナ語の新聞や雑誌も減少しました。1930 年代には、ホロドモールと呼ばれるスターリン政府によるウクライナ人に対するジェノサイドが起き、ウクライナ人を餓死させるための食糧略奪が行われました。当時の人の証言によると、壁の中に食料を隠しておいた人が射殺され、その食糧は壁を壊して持ち去られてしまったとのことです。また、子供のために食料を分けてほしいと懇願した人が、その場で子供と共に射殺されてしまったという話もあります。当時は、ウクライナ人にとって実質的に国境が閉ざされていて、一般の人は逃げることもできなかったのです。

これらの事実は、ウクライナが 1991 年に独立するまで閉ざされてきたもので、今でもどれだけの人が亡くなったのか、はっきりとは分かっていません。500 万人～1000 万人が亡くなったとも言われますが、これは当時のウクライナの人口の 2 割に当たる数です。ホロコーストで亡くなったユダヤ人が 600 万人ですから、それと同じ、またはそれを上回るウクライナ人がロシア人に殺されているという事実があるのです。1942 年には、ウクライナ独立を求める蜂起軍がソ連と戦い、多くのウクライナ人が亡くなりました。1960 年代には、

ソ連の圧力が強まり、ウクライナ文学の活動が制限され、多くの作家、文化人が拘束され、国外へ逃亡･亡命する者が多数出ました。2014 年にクリミアがロシアに強制的に併合され、ドンバス地方にロシア人が送り込まれて、今の戦争が始まっています。
以上のように、ウクライナは長年ロシアからの圧迫を受けていて、人の命が奪われただけでなく、ウクライナ人としてのアイデンティティまで失わされようとしてきました。
ウクライナ語の禁止、著名な文化人の殺害などによって、本来ウクライナの文化や文学がたどるべきであった発展・発達のチャンスを奪われ続けてきたのです。

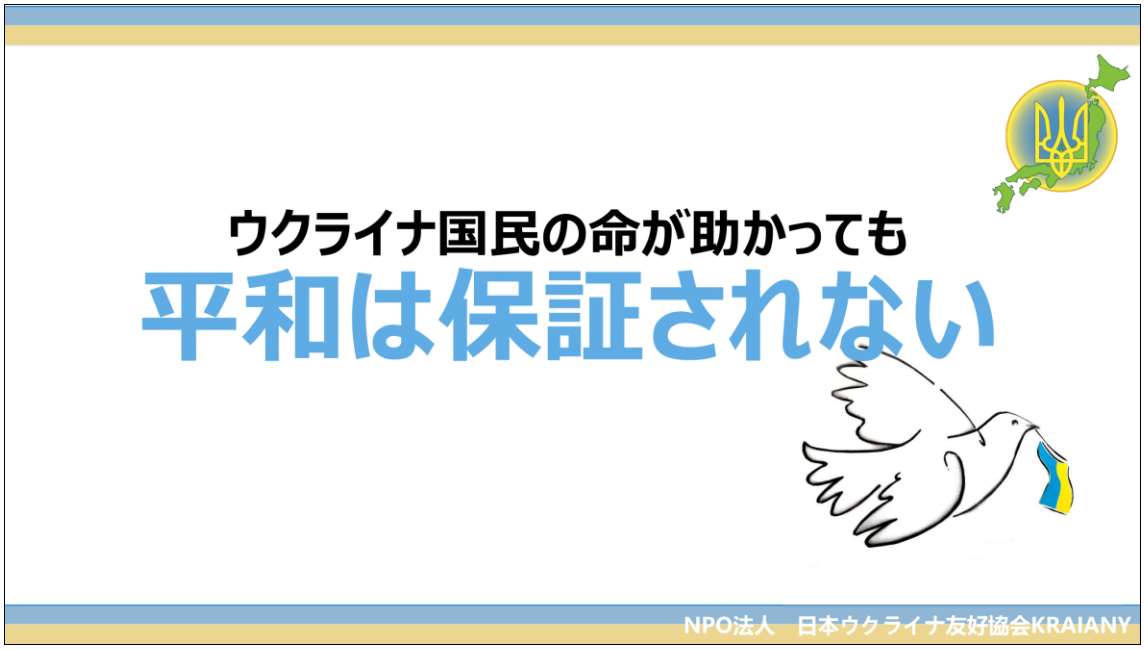
こうした長年にわたる歴史的な経緯は、ウクライナが自由を手にするためにこれだけ長く戦ってきているという事実を証明するもので、とても大切なものです。
1991 年の独立から 30 年を経て、今また同じ歴史が繰り返されているのです。
ロシア軍が撤退した後に判明したブチャやイルピン等の惨状は、多くの民間人、女性、子供が殺されただけでなく、ロシア軍が住民に対して意図的に精神的危害を加えてきたことも明らかにしています。今ニュースで伝えられている内容は、実際の状況の 1%も伝えていないと思います。実際の現場は、TV で見るよりずっと悲惨です。ブチャ、イルピンの状況は、ロシア軍が撤退してから判明したのですが、ウクライナ国内では既に 8 年も占領されている地域があるのです。TV カメラが入れない地域もあります。8 年占領されている地域が、どれだけ悲惨な状況か、国連の機関も入れないので実態は分かりません。報道されていない何百もの町や村があります。マリウポリでは、戦争犯罪の証拠を隠すために民間人の遺体が燃やされています。被害の実態は掴めなくなっています。マリウポリでは、病院・学校・公民館が狙い撃ちにされ、町の 9 割以上が破壊されました。食料・水・医薬品が底をついて、民間人は水たまりの水や集合住宅の温水ヒーターのパイプに残っている水を汲み取って飲用にして命をつないでいる状態でした。脱水症状や飢餓で、多くの子供が亡くなっています。
戦争というと、ミサイルや砲撃などで亡くなる人が多いというイメージがありますが、それ以上に食料や水を差し止められたり、医療品が渡されないということによって亡くなる人も多いのです。
ロシアからは、人道回廊を作っているという話が流れてきますが、ウクライナへ向かう方向には地雷が敷かれ、進める方向はロシアしかないということでロシアに向かわざるを得なくなっています。マリウポリに残りたい人もバスに乗せられ、ロシアに強制移住させられているのです。その人たちは収容所に入れられ、体にタトゥーがないかチェックされ（注：ウクライナのアゾフ大隊は刺青をしている人が多い)、情報を取るために拷問され、携帯電話を調べられてウクライナ寄りの発言をしていた人は行方不明になったりしています。
ウクライナには、ロシアに親族がいる人も多いのですが、ロシアに行ってもその親族には会わせてもらえません。また、30 万人以上の子供が強制的にロシアに移住させられていて、親を殺された子供や親と離れ離れになって迷子になった子供たちは、ロシア国内でロシア人に引き取られロシア人として育てられていくので、ウクライナ人としてのアイデンティ

ティを持つことはなくなるでしょう。文化遺産についても、何百年もの歴史を持つ木造の教会にミサイルが撃ち込まれて破壊されたり、博物館にあった古代スキタイ族の金の工芸品が 200 点以上盗み出されたり、ピカソに認められた国民画家のマリア・プリマチェンコの作品を収蔵する美術館が砲撃を受けて作品が燃えてしまうなどの被害も出ています。

© KRAIANY

ヘルソン州では、ウクライナの食糧がロシアによって略奪され、外国に輸出されそうになっているという話がありますし、また農家の収穫の 7 割をロシアに渡さないと種苗の植え付けをさせてくれないという状況もあります。畑には地雷が設置されている所もありますし、軍事施設と全く関係がないのに小麦畑に火をつけられ燃やされてしまった所があります。
原子力発電施設も危険にさらされていて、発電所内にロシアの武器・弾薬が貯蔵されているので、もし爆発したらチェルノブイリ以上の大変な事態となり、その影響はウクライナだけにとどまらずヨーロッパ全体に被害が及ぶことが心配されています。
今ウクライナの中で起きていることは、まさに戦争犯罪そのものなのですが、こうした案件は何万件も報告されています。ロシア軍は、民間施設への攻撃、食料・水の略奪、住民の強制移住、文化財の破壊など、単なる戦争を超えてウクライナ人に対するジェノサイドを行っているということを是非認識して頂きたいと思います。
今回日本に避難してきた人たちは、ハルキウ、ザポリージャ、マリウポリなどの悲惨な環境で暮らしていて、父親や夫といった男性をウクライナ国内に残してきた女性や子供連れの人が多いのです。実際に戦火の中を逃れてきた人や、そういう目に合う前にと避難してきた人たちです。子供の中には、空襲警報や爆発音を聞きながら地下で生活していた者も多くいます。

今度の戦争で、もしウクライナが負けた場合、あるいは停戦合意して一部の地域を手放すということになった場合、どういう状況が待っているかというと、ブチャやイルピン、マリウポリの町で起きたような虐殺、そして命が助かったとしてもウクライナ人としてのアイデンティティを持つというだけで殺される危険があり、そうした危険の中で生きていくことになります。つまり、ウクライナが勝つという形で戦争が終わる以外には、ウクライナに平和は来ないのです。命が助かったとしても、ウクライナ人の平和は保証されないのです。一部の地域を手放してしまえば、その地域に住んでいる人々の人生を見放すことになってしまいます。皆様も、もし日本で一部の地域を他国に手渡すようなことになればどんなことが起きるのか、想像してみてほしいと思います。
いま日本に住むウクライナ人は、こういう危機感の中で生活しています。



© KRAIANY

日本ウクライナ友好協会は、2000 年頃から日本に住むウクライナ人のコミュニティとして、ウクライナの文化、歴史などを日本の人々に紹介する活動をしてきました。2021 年に正式に NPO 法人として登録され、これまで教育イベント、ワークショップ、ウクライナフェスティバル、パレードなどの文化イベントを開催し、ウクライナを知ってもらうことをミッションとして活動してきました。具体的にどのような活動をしているかの例をあげると、10 年以上前には日曜学校を開校し、日本で生まれ育った子供たちがウクライナの文化やウクライナ語を学ぶ機会を提供しています。設立当初は 5 名でしたが、今では 40 名の子供が集まっています。近々大阪にも 2 つ目の日曜学校を開く予定です。
また、ウクライナの伝統的な民族衣装のヴィシヴァンカを着てお祝いする毎年 5 月の第 3

木曜日のお祭り、ヴィシヴァンカの日では日本でも毎年パレードを行ってきました。
さらには、ウクライナのイースターエッグであるピッサンキ作りやお守り人形のモータンカ作りなどの体験活動、また最近ユネスコにも登録された伝統料理ボルシチ作りなども地域の人々と共に行っています。

主な活動実績

・日曜学校「ジェレルツェ」
・文化フェスティバル
・ワークショップ
・避難民の支援

NPO法人　日本ウクライナ友好協会KRAIANY

© KRAIANY

ワークショップ

ウクライナの伝統的な工芸品の工作などのワークショップを開催しています。

ピサンキ（イースターエッグ）、モタンカ人形作り、ヴィビーカ（布染め）、料理教室など地域の方向けに不定期で開催し、毎回10名～30名の人が集まります。

NPO法人　日本ウクライナ友好協会KRAIANY

© KRAIANY

2014 年のロシアのクリミア侵攻により、私たちの活動もすこし変わってきました。日本ではウクライナ語を話す人が少ないこともあって、どうしてもロシアのプロパガンダが力を持ちがちだと思います。そこで少しでも正しい情報を広め、理解してもらうためにジャーナリストと連携したり、ウクライナからのニュースの翻訳といったことも行っています。ロシアによるドンバス地方への侵略が始まってからは、被害者のための支援を続け、今年の 3 月からは日本へ避難してきたウクライナ人に対して情報提供したり、生活のサポートを行ったりしています。

こうした活動は、2 月 24 日（注：ロシアがウクライナへ攻め入った日）以降、私たちの活動が変わったというよりも、日本の皆様のご支援があったからこそこうした活動に取り組めたと思っています。ロシアの侵略があってから、とてもたくさんの応援の言葉を頂戴し、多くの団体、個人の方々から支援に関するお問い合わせを頂きました。支援の申し出、ボランテイアの申し出などは私たちの大きな励みになっています。避難民に対しても、暖かい目で受け入れて下さり、受け入れ先によっては、日本文化に触れる機会として日帰り旅行を企画してくださった所もあります。避難民に対して、どういう状況の中をどのように逃れてきたのか、ということを理解して下さった上で支援して頂いており、とても感謝しています。
特に何が嬉しいかと言うと、ウクライナの文化・歴史に興味を持つ人が増え、インターネットでもウクライナの伝統工芸についての投稿が増えたり、ウクライナのアーティストやお店に対する支援としてオンラインでのショッピングをしたり、ウクライナ語を学ぶ人が増えていることです。戦争という状況下ではあっても、日本の人のウクライナへの関心が高まっているということで、私たちにとってとても嬉しく励みになるものです。
これからも私たちは、日本とウクライナの間の懸け橋になっていきたいと思っています。

今は、戦争によって避難民が増えているという大変辛い状況の中ではありますが、ウクライナから日本に来る人が増えているということは、ウクライナに日本の文化を伝える好機であるとも言えます。ウクライナ人が日本の人々と関わりを持つことで、お互いの国の文化が相互に交流しあって、より理解が深まると信じています。
以前から日本にいる私たちも、日本に移り住んで様々な壁を乗り越えてきた経験から、避難民の方たちが日本で直面する課題に寄り添って、その解決に向けて支援していこうと考えています。
具体的には、生活支援、子供向けの日曜学校開催、地域の人々の文化交流、日本語レッスン、避難者同士の交流の場としてのヨガ教室などです。先週は浴衣の着付け教室を行って、大変好評でした。

避難民は日本語がわからない方が多いので、得られる情報が限られてしまいます。特に、銀行での口座開設、携帯電話の契約、短期ビザから 1 年ビザへの切り替えなどはとても切実な問題です。

何処に行けば情報が得られるのか戸惑う人も多く、支援内容が自治体によって異なるということもあって、日本ウクライナ友好協会としてできるだけワンストップでの情報提供ができるように活動しています。

また、平日の毎日 15 分間、インターFM で放送する機会を頂いたので、日本での生活に役立つ情報をウクライナ語で流しています。これは全国で聴取可能です。

インタラクティブな形でも、日本財団の支援を受けてオンラインセミナーを行っています。女性の避難者が多いので、産婦人科のかかり方や薬について、また子育てなどのテーマで専門家の講演なども行い、個別の相談にも応じています。

避難してきた子供たちは、心の傷を負っているケースもありケアが必要です。2008 年から開講している日曜学校には避難民の子供も参加していて、彼等は日本の学校で日本人の友達と遊ぶことは楽しいのですが、ウクライナ語で自分の思ったことを伝えられないことに苦しんでいます。毎日、空襲警報や爆発音を聞いていたので、それがトラウマになり、精神的な障害となっていることもあります。私たちの日曜学校では、これまではウクライナの文化や言葉を学ぶことを目標にしていましたが、戦争が起きて以来、精神面のサポートを行うためアート療法を取り入れて、幼い子供でも感情表現ができるような場を作るようにしています。

そうした活動を続けるに当たって、施設の確保が大きな課題になっています。長期に亘って日曜学校の場を確保することは難しく、今後子供の人数が増えることを考えると、この施設確保は重要な問題です。また、避難民が言語の壁を乗り越えて、自ら情報を得て生活していけるようにすることも大変重要なことです。このために、情報源をできるだけ一本化することが求められています。そこで日本ウクライナ友好協会では、日本ウクライナ交流センターを作ることに取り組んでいます。現在は施設の確保のために模索中ですが、この施設は日本におけるウクライナ文化の中心となるように、またウクライナから来日した人たちの憩いの場となるように企画しています。日本でウクライナ文化に触れられる場所であり、日本人にウクライナ文化を理解してもらう場所ともなる施設です。
また、避難民として子供と共に日本へ来た人たちは、着のみ着のままで余分なものは持たないで来た人が多いので、子供がウクライナ語の本に触れる場所がどうしても必要です。私たちは、個人の持っている本を収集して、図書館を作ることも考えています。

© KRAIANY

戦争は長引くことが予想されますが、もともとは戦争を止めさせることが重要な課題でした。少しでも犠牲者を減らすためにも、現地への支援を続けていきたいと考えています。
今、日本ウクライナ友好協会は、ウクライナの現地でのボランテイア活動に対して寄付を行っていて、日本で頂いた支援金も現地のボランテイア活動に送金しています。例えば、ハルキウから避難する人たちを車で送るボランテイアにはガソリン代を、医薬品を配るボランテイアには薬の代金を支援しています。家族を殺されても、現地で犠牲者を減らすための人道支援活動を行っている人もいます。
私たちは、今後もこのようなボランティアの人たちに対して支援活動を行っていく考えで

す。どうぞこれからも皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

できるだけ早くウクライナが勝利して、本来の美しい風景に戻ることを願っています。
本日は有難うございました。

以上
事務局

文中の（注：）は、事務局で注記したものです。